

【日植防シンポジウムから】

近年我が国で新たに発生が確認された病害虫と
今後警戒すべき病害虫農林水産省消費・安全局植物防疫課防疫対策室 ふる古 はた畑 とおる徹

はじめに

我が国は、温暖、多雨、多湿な気象条件で、集約的な農業が続けられているため、もともと病害虫の発生が多い環境にある。

このため、病害虫の発生状況、気象、作物の生育状況等の各種情報を調査し、病害虫のその後の発生動向を予測し、関係者に発生予察情報を提供する取組が重要である。生産者は、これらの情報に基づき、適時的確な管理作業（防除）が実施されることにより、発生を効果的に抑制することが可能となる。

しかし、近年、例年とは異なる天候の推移により、平年より病害虫の発生が多くなる事例があり、行政でも様々な取組を進めている。

本稿では、近年注目された病害虫の発生事例や侵入病害虫への対応事例等を紹介するので、今後の病害虫防除の取組の参考にしていただきたい。

I 近年注目された病害虫の発生事例

1 タマネギベと病（2016年）

タマネギベと病は、生育中のタマネギの葉が枯れることにより、玉の肥大が進まないことで大幅な減収被害となる病気で、2016年に佐賀県を中心に多発した。タマネギベと病は、*Peronospora destructor* (Berkeley) Fries による病害で、感染すると葉色が光沢のない淡黄緑色となり、外側に湾曲。やがて衰弱し枯死する（図-1）。前年秋に苗床や圃場で感染し、無病徴のまま越冬し、年越し後の春先から発病が始まり、その後の降雨により罹病株から伝搬し、さらに感染が拡大する。2016年は、西日本の一部で大雪と春期の大雨等により多発し、2月以降発生予察情報の注意報・警報が数多く発出された。

Recent Occurrence of Important Plant Pests in Japan and Invasive Plant Pests which Japan is Particularly on Alert Against. By Toru FURUHATA

（キーワード：発生予察，侵入病害虫，緊急防除，植物検疫，侵入警戒）

緊急的な対策を講じるため、防除技術の開発と普及に関する共同研究に取り組み、罹病株の抜き取り、防除効果のある薬剤の散布、輪作の推奨を内容とした「タマネギベと病防除対策マニュアル」をとりまとめた。

2 リンゴ黒星病（2018年）

リンゴ黒星病は、*Venturia inaequalis* (Cooke) Winter による病害で、リンゴの葉や果実等に病斑を形成し、激しく発病すると、落葉、奇形果、裂果を引き起こし、減収被害となる（図-2）。2018年に青森県を中心に多発した。

前年の被害落葉が翌春の主な一次伝染源となり、感染した葉や果実上の黒褐色のすす状の病斑で形成される分

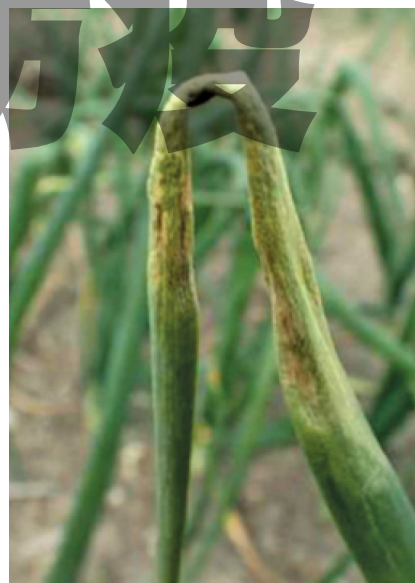


図-1 タマネギベと病



図-2 リンゴ黒星病（左：葉の初期病斑，右：幼果の病斑）山形県のHPより引用。